

## 家政学・被服学における福祉教育とその効果

内田 直子

UCHIDA Naoko

被服関係の科目の中で高齢者、障害者の衣生活の講義を実施するに際し、学生がそれらに関してどの程度の認識を持ち合わせ、また1年後、その認識はどのように変わったのかを確認し、今後の被服学ならびに広く家政学領域での福祉教育の意義と可能性を検討した。調査方法は、1年次履修者に対して高齢者・障害者に関する衣生活の単元の前に現状認識調査を実施し、1年後、再び同一人に同一調査を実施した。その結果、受講前の学生の意識は、高齢者の服装は暗色、障害者は健常者と同じような色や白などの印象を持っていた。また服装は機能性を重視し、高齢者女性の化粧やおしゃれは肯定的に捉えている。1年後の再調査では、1年次よりファッションセンスへの認識が強くなり、高齢者女性の化粧やおしゃれの肯定度も増加していた。一度でも授業で扱うことによって、意識変化があることが明らかとなり、結果的にこの知識が卒業後も現場に還元されていくのではないかとと思われる。

キーワード：被服学、高齢者、障害者、福祉教育、意識変化、現場還元

### 1. はじめに

国家資格の介護福祉士養成課程に家政学概論が必修科目であることと相俟って、家政学領域でも福祉社会の中での衣食住のあり方をテーマにした研究が1990年代から2000年初頭にかけて多く見られた。特に2000年の介護保険導入後には、高齢者、障害者だけでなく「だれもが楽しめるファッション」というコンセプトのもと、ユニバーサルファッション協会という任意団体も発足し、福祉社会の中での被服学のあり方が益々問われ、様々な観点から高齢者、障害者に関する衣服の検討が多くなされてきた。

たとえば、福祉教育の観点を家庭科の中に導入するため、教材開発及び指導方法の改善を検討した研究<sup>1)</sup>、大学において被服構成系から福祉教育を考えた研究<sup>2)</sup>、家政学を介護福祉教育内での担当している現場からの報告研究<sup>3)</sup>などがある。

このような社会的必要性の背景もあり、著者が担当しているファッション専攻の「衣生活文化論」と、食物栄養専攻食生活コースの「被服学」において、高齢

者、障害者の衣生活に関する内容を取り扱ってきた。しかし、学生の中には、実際に高齢者や障害者と実生活で接する機会が皆無の者もいる。そのため、現状では学生達がどのような認識をもっているのか、本学で前述の科目を担当した2005年より毎回調査してきた。

本報告では、このうち、ここ最新2年間の結果をまとめ、現代の若者の高齢者、障害者の衣生活に対する認識の現状と、講義を受けたことによってそのあと意識がどのように変化したかを報告する。そして、今後の被服学ならびに広く家政学領域での福祉教育の意義と可能性を考えたい。

なお、本報告でいう「福祉」とは「社会の構成員に等しくもたらされるべき幸福」<sup>4)</sup>であるとし、そのため福祉は万人に関わるものであるが、日本では多く弱者救済の視点で用いられてきたところがある。そのため、この意味を踏まえた上で、ここでは高齢者、障害者に焦点を当てた内容としている。

### 2. 方法

#### 2.1 調査時期及び調査対象

科目はいずれも1年次開講のもので、2008年度は、6月「衣生活文化論」履修者29名と7月「被服学」履修者6名の計35名に実施し、2009年度も同時期に「衣生活文化論」履修者20名と「被服学」履修者6名の計26名に実施した。2年間で回答者は合計61名である。

また、追跡調査として再度同一内容の調査を2008年度「衣生活文化論」回答者と同じ29名に対し、2009年7月に実施した。

## 2.2 調査内容

調査の主な内容は、高齢者・障害者の、(1)服装の色イメージ、(2)服装検討の有無、(3)機能性またはファッションセンスの重視度、(4)化粧について、(5)ユニバーサルファッションについて、である。

## 2.3 調査方法

調査は質問紙法を用い、2.2調査内容の(1)は自由記述、(2)は4段階評定尺度、(3)、(4)は7段階評定尺度、(5)は4つからの選択肢とし、自由記述式と選択式を併用した。また、回答への責任と1年後の理解の同一人の変化をみるため、学籍番号を整理番号として記させた。

## 3. 結果 および 考察

### 3.1 受講前的高齢者・障害者に対する認識の現状

#### 3.1.1 高齢者・障害者の服装の色イメージ

設問1と設問2では、高齢者、障害者の男女別にイメージされる服装の色を複数回答可とし、自由に書いてもらった。同じ色でも日本語、カタカナと表記が異なっているものや、色相・彩度・明度が近い色のものは、任意に近い系統ごとでまとめた。結果は表1に示すとおりである。

高齢者男性では、イメージの多かった色は、灰色系、茶系、黒、白、青・紺系となった。いわゆる無彩色や暗色系が主流となっている。高齢者女性で多かったのは、黒、茶系、紫系、赤系、白、ベージュ系などである。明色もあり男性より色の種類が多岐に亘っている。しかし、多くは女性の場合も無彩色や暗色系が上位にきており、高齢者という括りで学生たちからみたイメージは、暗く地味な雰囲気といえる。

障害者男性では、灰色系、白、青・紺系、黒、黄系と続き、障害者女性では、ピンク系、白、黒、赤系、

黄系などで、この他、具体的な色でなく「特にない」や「何色でも」「健常者とかわからない」などの回答もあった。障害者と一括りにしても、年齢や障害の内容も様々であるため、回答も多種多様で健常者と変わらないという部分もあるのだろう。ただ、男女とも白が多い結果は、この調査を本学で実施以前に、他学の介護福祉士養成校の同年代の学生にヒアリングで調査した時、障害者は「Tシャツ」のイメージが強く、そのために「白」のイメージがあるという回答を得ている。それが、ここでも同じ意味をもつのではないかと推察する。

表1 高齢者・障害者の服装の色のイメージ

(N=61)

高齢者・男性		高齢者・女性		障害者・男性		障害者・女性	
色	延数	色	延数	色	延数	色	延数
灰色系	38	黒	15	灰色系	13	ピンク系	15
茶系	18	茶系	15	白	13	白	12
黒	15	紫系	15	青・紺系	13	黒	9
白	9	赤系	14	黒	8	赤系	8
青・紺系	8	白	9	黄系	6	黄系	7
ベージュ系	6	ベージュ系	8	水色	5	灰色系	5
緑系	6	灰色系	7	赤系	4	緑系	3
黄系	3	水色	5	緑系	4	茶系	2
水色	2	黄系	5	茶系	3	クリーム色	1
		ピンク系	5	クリーム色	1	ベージュ系	1
		青・紺系	2	橙色	1	橙色	1
		緑系	1			紫	1
		橙色	1			青・紺系	1

#### 3.1.2 高齢者・障害者の服装検討の有無

設問3の「高齢者の服装について考えたことがどれくらいありますか」では、「ない」「ややある」「かなりある」「大変ある」の4段階評定尺度で問い、問いの補足事項として、「提言、工夫、問題意識…など」の一文を付記している。

その結果、表2に示すように、「ややある」「かなりある」「大変ある」の回答者の合計55.7%、「ない」者44.3%となり、なにかしら「ある」とした者が過半数を超える結果であった。考える具体的な内容は不明であるが、自分の祖父母との関わりや、高齢者援助等のボランティア経験がある生活であれば、気付く部分もあるのではないかとと思われる。

同様に設問4の「障害者の服装について、考えたことがどれくらいありますか」では、「ややある」「かなりある」「大変ある」の合計は32.8%、「ない」者は67.2%と、「ない」者は「ある」者の2倍にもなる。障害者が

身近に存在することは、高齢者以上に機会がないため、服装の考慮まで意識がおきることがないのだと考えられる。

表2 高齢者・障害者の服装検討の有無

N=61(%)				
	ない	ややある	かなりある	大変ある
(設問3)高齢者の服装について、考えたことがどれくらいありますか。	44.3	45.9	8.2	1.6
(設問4)障害者の服装について、考えたことがどれくらいありますか。	67.2	24.6	6.6	1.6

3.1.3 高齢者・障害者の服装に関する機能性またはファッションセンスの重視度

設問5の高齢者の服装は、「ファッションセンス(おしゃれ、かっこよさなど)」と「機能性(使い勝手など)」のどちらにどの程度重きをおいた方がよいかについて、図1の結果にあるように、7段階評定尺度で、ファッションセンスと機能性を対にし、両者の意識の高く思う方から「(+3)=大変おく」「(+2)=かなりおく」「(+1)=ややおく」、中央を「(0)=どちらでもない」とし、該当する箇所一つを選ばせた。ただし集計では、ファッションセンスを「大変おく」1点、「かなりおく」2点、「ややおく」3点、「どちらでもない」4点、「機能性を「ややおく」5点、「かなりおく」6点、「大変おく」7点として算出した。

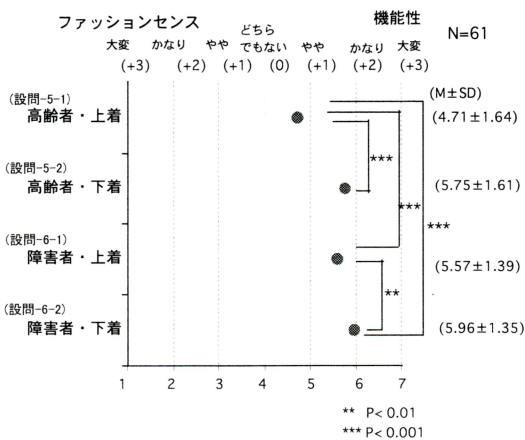


図1 高齢者・障害者の服装の重視度

高齢者の「上着」はファッションセンスより機能性に重きがみられる。「下着」になると、さらに機能性に重きがおかれ、この結果により、服装の表に見えない部分では、機能性に重きをおいたほうがよいと考えていることがみてとれる。

同様に設問6の障害者の服装では、「上着」も「下着」ともに機能性への重きがおかれている。これは、障害者は高齢者以上に身体的不自由さなどの印象があるためか、より機能性を重視する必要があると考えているようである。

3.1.4 高齢者女性の化粧・おしゃれについて

設問7-1の「高齢者の女性がお化粧や、おしゃれをすることにどう感じるか」については、前項3.1.3と同様、中央を「どちらでもない(0)」とし、対の「年甲斐もなく感じる」「年甲斐もなくとは感じない」をそれぞれ「(+3) 大変」「(+2) かなり」「(+1) やや」とし選ばせた。集計では「年甲斐もなく感じる(+3)」1点、から順に1点ずつ加点して「年甲斐もなくとは感じない(+3)」7点として算出した。

また、設問7-2の「化粧やおしゃれが必要かどうか」でも、「どちらでもない(0)」とし、「大変必要に思う」「全く不必要に思う」をそれぞれ「(+3) 大変」「(+2) かなり」「(+1) やや」として選ばせた。ここも集計では、「大変必要に思う(+3)」1点として順に1点ずつ加点して「全く不必要に思う(+3)」7点として算出した。

その結果、図2の結果に示すように、高齢者女性が化粧やおしゃれをすることは年甲斐もなくとは感じない傾向があり、また化粧やおしゃれをするような行為は必要であると、肯定的な意識をもっていた。

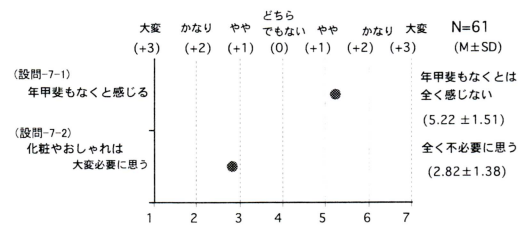


図2 高齢者女性に対する化粧感

3.1.5 ユニバーサルファッションについて

設問8の「ユニバーサルファッション」という言葉の認知度について、「聞いたことがない」、「聞いたことはあるが、中身は知らない」、「聞いていたことがあり、



なんとなく説明できる」、「知っているし、説明できる」の各項目の回答者の割合は表3のようになった。「聞いたことがない」者は27.1%だが、回答者の中でこの言葉を別の授業で習ったというコメントもあり、結果的に70%余りの者がこの調査時点で多少の認識をもっていた。

表3 ユニバーサルファッションの認知度

N=59(%)

質問内容	割合
1.聞いたことがない	27.1
2.聞いたことはあるが中身は知らない	42.4
3.聞いたことがあり、なんとなく説明出来る	30.5
4.知っているし、説明できる	0.0

3.2 追跡調査による1年後の認識状況

3.2.1 回答者の全体的傾向

1年次の「衣生活文化論」において、著者はこの調査実施後講義内で、高齢者・障害者の衣生活では、服装は機能性だけでなく、着装や化粧を通して情動の活性化や生活の減り張りが喚起される必要があるとしている。このことを学んだ学生たちの1年後の考え方を確認するために、1年次に行ったものと同一調査を再調査可能であった29人に実施した。以下、29人に関する1年次、2年次の全体的傾向について述べる。

設問1、設問2の色のイメージ結果を表4、表5の高齢者、障害者の服装の色イメージとして、色の多い順に並べた。

表4 1年次、2年次の比較・高齢者の服装の色イメージ

N=29

高齢者・男性		高齢者・女性	
1年次(2008年)	2年次(2009年)	1年次(2008年)	2年次(2009年)
色	延数	色	延数
灰色系	17	灰色系	14
黒	11	茶系	11
茶系	9	ベージュ系	4
青・紺系	7	緑系	4
緑系	4	白	3
ベージュ系	3	黒	3
白	3	水色	2
黄系	2	青・紺系	4
		赤系	9
		黒	9
		白	7
		紫系	7
		茶色	7
		紫系	5
		茶系	4
		白	4
		ピンク系	3
		水色	3
		黄系	3
		黒	3
		ベージュ系	3
		灰色系	3
		緑系	2
		黄系	2
		青・紺系	2
		青・紺系	2
		白	1
		緑系	1
		茶色	1
		緑系	1

表5 1年次、2年次の比較・障害者の服装の色イメージ

N=29

障害者・男性		障害者・女性	
1年次(2008年)	2年次(2009年)	1年次(2008年)	2年次(2009年)
色	延数	色	延数
青・紺系	6	白	13
白	4	青・紺系	8
灰色系	4	白	7
黒	3	赤系	4
水色	3	黄系	3
黄系	3	灰色系	2
緑系	2	ベージュ系	3
赤系	2	黒	2
橙色	1	緑系	1
		ベージュ系	1
		茶色	1

高齢者の服装の色イメージでは、両年とも男性の灰色系、女性の赤系など、上位に来ているものは変わらないが、1年次に黒色が上位に来ていたものが、男女とも2年次ではその数が減少し、その分暗色のイメージは後退したようである。

障害者の服装の色イメージでは、上位の色は、両年とも男性では青・紺系と白、女性では、ピンク系と白であった。ただし、白に関してその人数をみると男性、女性とも2年次が1年次の2~3倍の人数になっている。これは、1年次のこの調査の後、「なぜ白のイメージがあるのか」ということを解説しており、その影響があるのではないかと考えられる。

さらに、設問3から設問8までの1年次と2年次の回答者の平均値の結果を示したのが図3から図6である。設問3、4は、「ない」0点、「ややある」1点、「かなりある」2点「大変ある」3点とした。設問5、6では3.1.3項と設問7は、3.1.4項と同様の配点にした。設問8は、「聞いたことがない」1点、「聞いたことはあるが、中身は知らない」2点、「聞いていたことがあり、なんとなく説明できる」3点、「知っているし、説明できる」4点とした。

t検定により有意な差がみられたものは、設問7-2と設問8であった。つまり化粧の必要性を1年次の時もより強く認識し、また「ユニバーサルファッション」という用語の認識もより深まっていることがわかる。

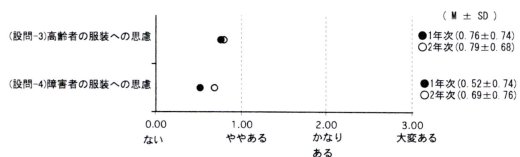


図3 服装検討の有無

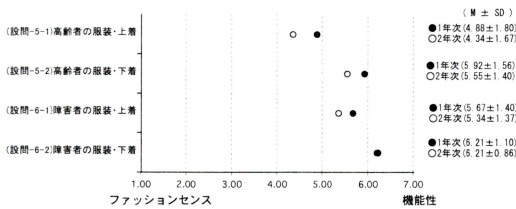


図4 服装の重視度

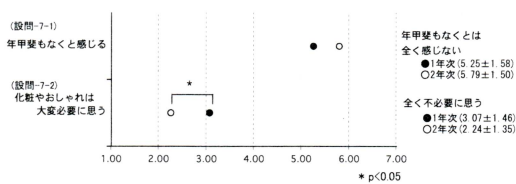


図5 高齢女性の化粧について

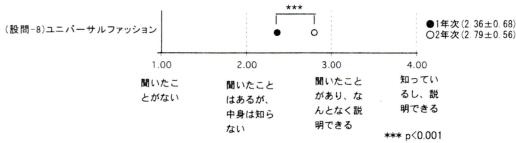


図6 ユニバーサルファッションについて

3.2.2 同一個人内の評価移行

次に個人内での1年次評価と2年次評価の格差をみるために、同一個人内の1年次評価点から2年次評価点を引いてみた。格差0はその項目の評価の変化がなかったもので、(-)または(+)となるものは評価が移行したことになる。各項目で該当する格差の回答者の割合をまとめたのが表6である。

表6 1年次と2年次の評価の格差

質問項目 \ 格差	各格差 (1年次の評価 - 2年次の評価) の人数割合 (%)									有効回答数 (%)	格差の平均値	標準偏差	
	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4				5
1. (設問-3) 高齢者の服装への意識	0	0	3.4	17.2	62.1	13.8	3.4	0	0	0	29	-0.03	0.78
2. (設問-4) 障害者の服装への意識	0	0	8.9	13.8	69.0	10.3	0	0	0	0	29	-0.17	0.71
3. (設問-5-1) 高齢者の服装・上着	4.2	0	8.3	8.3	20.8	37.5	8.3	8.3	0	4.2	24	0.58	1.84
4. (設問-5-2) 高齢者の服装・下着	12.5	0	4.2	8.3	25.0	20.8	16.7	0	12.5	0	24	0.38	2.28
5. (設問-6-1) 障害者の服装・上着	0	0	4.2	0	16.7	41.7	20.8	16.7	0	0	24	0.25	1.19
6. (設問-6-2) 障害者の服装・下着	0	0	4.2	8.3	12.5	45.8	25.0	0	4.2	0	24	-0.04	1.23
7. (設問-7-1) 高齢女性に対する化粧感	0	0	17.9	7.1	14.3	35.7	21.4	3.6	0	0	28	-0.54	1.48
8. (設問-7-2) 化粧の必要性	3.6	3.6	0	3.6	35.7	17.9	17.9	14.3	3.6	0	28	0.82	1.76
9. (設問-8) ユニバーサルファッション	-	0	0	3.6	35.7	60.7	0	0	0	0	28	-0.43	0.57

3.2.2.1 服装の検討や重視事項について

設問3の高齢者の服装を考えているかどうかは、1年次と2年次の格差0が62.1%、設問4の障害者の服装を考えているかどうかでは、格差0が69.0%と、どちらもあまり積極的に考えるということにはまだならないようであった。

設問5-1から設問6-2までは、(+)の数値であるものは、機能性からファッションセンスに移行した評価で、逆に(-)の数値は、ファッションセンスから機能性に移行した評価である。平均値としては、t検定で有意差がなかったものでも、個人の変化でみると設問5-1の高齢者の上着については(+1)以上の格差があった者が58.3%となり、評価変化のない格差0の20.8%より、3倍近い人数が1年次の時より意識がファッションセンスに移行している。設問5-2の高齢者の下着は、格差0の25.0%に対し、(+1)以上の格差であった者は50.0%で、これも2倍の者が上着と同じく、1年次の時より意識がファッションセンスに移行している。

設問6-1の障害者の上着では、格差0の41.7%に対し、(+1)以上の格差であった者は37.5%、設問6-2の障害者の下着では、格差0の45.8%に対し、(+1)以上の格差であった者は29.2%で、どちらも高齢者ほどファッションセンスに意識が移行していないことがわかる。

3.2.2.2 高齢者女性の化粧とユニバーサルファッションについて

設問7-1の高齢者女性の化粧は年甲斐もないかどうかでは、(+)の数値であるものは、「年甲斐もない」とより感じ、(-)の数値では「年甲斐もない」と感じていないことになる。ここでは格差0の35.7%、(-3)から(-1)の(-)格差の合計が39.3%であったことから、1年次と同じかそれ以上に「年甲斐もない」とは感じない傾向になったといえる。

さらに設問7-2の高齢者女性に化粧が必要かどうかは、(+1)以上の格差であった者は53.6%で、1年次より、半数以上の者が「より必要」という認識にたっていることになる。

設問8のユニバーサルファッションでは、格差が(-)の数値であると1年次より「知っている」ことになる。ここでは60.7%は格差0なので1年次の現状維持だが、(-1)以下の格差の39.3%の者が1年次より認識を強めている。(+)格差は0.0%であった。つまり少なくとも、1年次より知識が低下することはなかったことになる。

#### 4. ま と め

本報告は、被服関係の科目の中で高齢者、障害者の衣生活の講義を実施するあたり、学生の高齢者、障害者の被服等に関する現状認識のために行った調査結果と、合わせて1年後のその学習内容の定着具合の結果をまとめたものである。

結果として、受講前の学生の意識、高齢者の服装は暗色のイメージ、障害者は健常者と同じような色であっても白などの印象がある。服装は、ファッションセンスより機能性重視であった。高齢者女性の化粧やおしゃれは肯定的に捉えていた。受講1年後に再調査したところ、色イメージは部分的に暗色だけのイメージに留まらなくなった。また1年次より機能性重視が軽減され、さらに、高齢者女性の化粧やおしゃれの肯定度も増加していた。

今や一般的に被服学の授業の中で高齢者、障害者の衣服に関することを取り扱うことは、必須事項に近いが、実際の生活では、この方々に出会うことは頻繁とは言いがたいために、学生の認識のずれも生じてくる可能性がある。回答者数が少ないため、もっと多くの検証が必要であると思われる。しかし、一度でも授業で扱うことによって記憶に定着され、意識変化がおきる傾向が示されたことは明らかとなったといえよう。

本学の特にファッション専攻の学生は、進路先として販売員になる数が高く、販売の現場では若者や健常者だけでなく、ここで挙げた高齢者、障害者に接客をする場合もあろう。何も学習の刺激がないより、少しでも知識を得たことによって、多少なりとも現場に還元され、役立てられるのではないかと思われる。このことから、今後もより実践的な具体例を挙げながら、学生の意識に残る講義内容を検討したい。

#### 5. 注および参考文献

- (1) 中村喜久江, 笠井八重子, 大倉聖子, 浅田幸子, 百花草 孝子: 家庭科における福祉教育の教材開発及び指導方法の改善(第1報) 岡山県の小・中・高等学校における指導の現状, 岡山大学教育学部研究集録, 101 (1), pp. 149-162, 1996
- (2) 小山京子: 大学における福祉系被服教育の試み, 美作大学・美作大学短期大学部紀要, Vol. 49, 63~68, 2004
- (3) 中川英子: 介護福祉士養成教育のための「家政学概論」担当教員の立場からの私見, 介護福祉学, Vol.

4, No. 1, 69~76, 1997

(4) 松村明 編: 大辞林第二版, 三省堂, 1999

#### ピアスーパーバイザーからのコメント

本実践では、学生の高齢者、障害者の被服等に関する意識変化に成功している。学生は1年間の学習を通して、これらの人々の衣服に関して持っていた暗色や白などのイメージを変化させた。また、機能性だけでなくセンスやおしゃれの楽しみの重要性を理解するようになった。この意識の変化は、高齢者や障害者に対する衣服等の販売や接客の機会に生かされるとともに、高齢者の生活や生き方に対する認識の変化に結びつくものと捉えられ、十分に評価できる。1年間の授業により意識変化がもたらされたことが確認されている点が意義深く、次年度の本実践に生かせるだけでなく、他の領域の実践においても大変参考になる事例であると考える。

(担当: 早田由美子)